

令和2年度共通教育アンケート（1年次生対象）実施報告書

大学教育センター
全学共通教育部門長 大塚 豊

1. アンケートに対する学生の取り組みと周知方法について

●令和2年度の学生対象の共通教育アンケート調査は、共通教育を中心とした学修についての、自由記述を含む39項目の設問により、当初令和3年1月5日(火)～2月28日(日)の予定で実施した。しかし、最終日間近になっても全学の平均回答率が低調であったため、3月20日(土)まで実施期間を延長した。その結果、最終的には回答率は71.4%と、昨年度の53.1%と比べて大幅に上昇した。1年次生総数の924人中、回答したのは660人である。回答期間延長後に担任等を通じて、学生に回答を促すのに協力された学科長はじめ各学科に感謝したい。ただ、学科毎の回答率を見ると、薬学科89.8%、生物工学科89.7%、海洋生物科学科80.0%のように高い学科がある一方、人間文化学科42.0%、国際経済学科43.4%のように、全学平均を大きく下回る学科が見られる。学科により、毎年高い回答率を示すところと、再三にわたる依頼にもかかわらず回答率の上昇の見られない学科があることは遺憾である。また、概して理系学部の高回答率と文系学部の低回答率傾向がある。学部としての回答率は、薬学部89.8%(昨年度は90.4%)に次いで、生命工学部81.6%(昨年度は56.6%)、工学部73.7%(昨年度は51.5%)、人間文化学部61.3%(昨年度は43.5%)、経済学部60.7%(昨年度は45.2%)の順であった。来年度以降、回答率の低かった学部・学科については、所属学生への働きかけなど、何らかの積極的対応策を講じることを改めて強く求めたい。

2. 所属学部・学科のカリキュラム理解度および大学教育センターの学修支援体制理解度

●所属する学部・学科のカリキュラム・マップについて、9.1%の学生(昨年度は11.9%)。以下括弧内の数値は比較対照のために挙げる昨年度調査の結果)は「よく理解している」、44.4%(43.4%)は「だいたい理解している」と回答しており、半数強は理解している。一方、「少しだけ理解している」と回答したのは35.5%(29.9%)である。「まったく知らない」と回答したのは全学で3.3%、「まったく理解できていない」が1.5%、「聞いた(見た)ことがある」程度の者は6.2%と、1割強の1年次生は所属する学部・学科のカリキュラム・マップについての理解がきわめて乏しいと言わなければならない。

今年度の回答を学部別に見ると、経済学部の回答者のうち6.1%、薬学部の回答者のうち4.1%、工学部の回答者のうち同じく4.1%が「まったく知らない」と答えている。昨年度は回答者の6.5%もの学生が「まったく知らない」と答えていた生命工学部は、今年度の場合0.6%と、大幅に減少しており、何らかの周知のための措置が講じられたことも窺うことができる。また、「まったく理解できていない」と回答した学生について、経済学部が4.2%と高い。「聞いた(見た)ことがある」程度の者となると、経済学部5.5%、人間文化学部5.4%、工学部5.5%、生命工学部6.9%、薬学部8.2%となっている。自学部のカリキュラム・マップについて理解の乏しい学生がかなりの比率を占めると、進級や卒業に履修が必須の科目の単位の取りこぼしなどにもつながる。カリキュラムの編成について、より適切な説明が学生に対して行われることが望まれる。

●次に、大学教育センターが行っている各種の学修支援に関して、「まったく知らない」と回答した学生が回答者全体の67.1%(50.2%)にのぼった。平成30年度のこの比率は35.5%であり、その後、周知方法の改善をあれこれ試みたが、令和元年度は却って増え、今年度はコロナ禍の下で対面の指導が制約を受けたことも影響したのか、さらに増えてしまった。学修支援相談室について知っている者についても昨年度の40.5%から今年度の27.5%に減少した。eラーニング・システムについて知っている者も5.6%(9.3%)に留まった。

数学については、個別指導が行えるように、大学教育センターの特命講師が工学部生にはとくに焦点を絞って指導を行う措置を講じ、対面での指導が困難であった今年度は、特別の

オンライン教材を開発し利用するなど、並々ならぬ努力が重ねられたが未だ利用が限られている。

学修支援相談室を知っていると回答した 350 名に限り、その利用度を尋ねたところ、「まったく利用したことがない」が 91.7%にものぼり、「よく利用している」0.6%、「まあまあ利用している」2.0%、「たまに利用している」5.7%に留まっている。

学修支援相談室を「まったく利用したことがない」と答えた学生が挙げた利用しない理由は、「利用する必要性がない」34.1% (35.6%)、「場所が分からない」34.2% (26.0%)、「時間が合わない」10.8% (12.1%)、「個別相談に不安(抵抗)がある」6.5% (8.5%)、「職員室のように入りづらい」6.9% (8.0%)、「他人に知られたくない(周囲の目が気になる)」2.8% (5.4%) である。今年度は、自由記述に書かれていたように「大学に行く機会がない」「あまり学校に行く機会が少なかったので知らなかった」など、コロナ禍のために、そもそも大学の施設利用の機会が減少したことも大いに影響を及ぼしたことは間違いなからう。しかし、その一方で、eラーニングシステムに関して、自由記述欄には「先生に会えずとも問題が用意されていて学習しやすかった。」「利用しやすかった。」などのコメントが書き込まれていた。種々の学修支援の提供実態について、新入生のオリエンテーションをはじめとする可能な機会を捉えて周知に努めるとともに、よりいっそう気軽に訪れることができる雰囲気づくりが必要である。本当に学修支援を必要とする学生に的確な指導が提供されるためにも、大学教育センターのみでなく、全学を挙げて学修支援体制の認知度の向上に努めることを願いたい。

●高校までの科目を復習する授業すなわちリメディアル教育の必要性については、「必要である」が 43.3% (40.8%)、「まあまあ必要である」と回答した学生の割合は 35.6% (38.2%) で、ほぼ昨年度と同様の比率である。8割近くの学生がリメディアル教育に対する必要性を感じており、学修支援相談室が役立ちうる余地は十分にある。

●高校までの科目を復習する授業の必要性に関連して、「必要である」「まあまあ必要である」と答えた 78.9%の学生に、どの科目のリメディアル教育が必要かを尋ねたところ、英語が 24.6% (21.9%) とトップである。次いで、数学 17.5% (17.4%)、化学 11.7% (12.1%)、生物 10.5% (13.2%) など理数系の科目が続いているが、国語も 10.9% (9.9%) が必要と回答している。学生が最も復習を必要とすると考えている英語について、薬学部生は 16.8% (13.5%) が「必要」と答えているが、その他の学部は昨年度と同様に、いずれも 25%前後の者が選び、復習の必要性を感じている。入学直後に行う英語プレイスメント・テストにおいても、英語力に弱点のある学生が多く見出されている。担当教員は、中学、高校での学習を繰り返すのではなく、大学生として楽しめる、また発見のあるように教材及び指導法に配慮しており、教え方を対話的にして興味をもたせるよう腐心し、再履修クラスも設定して復習的な指導を実践しているが、なおいっそうの工夫を凝らすことが求められる。

3. フクトークについて

●大学教育センターでは、共通教育を中心として大学での学びに関する学生の生の声を聞き、可能な限り教育改革に活かしていくための「フクトーク」と称する催しを毎年ほぼ年末に実施している。今回の調査でも、令和元年度に引き続き本アンケートの質問項目としてフクトークに関する内容を設けている。令和2年度は12月9日(水)16:30~18:00に「教養教育科目E群のあり方について」をテーマとして実施し、各学科から2、3名ずつ出席した学生が討議を繰り広げた。この催しについて、「共通教育科目などについて教員と学生が考える企画「フクトーク」について知っていますか」との設問に対して、全体の 33.6% (39.0%) が「知っている」と回答し、他の 66.4% (61.0%) は知っていないと答えた。続く「フクトーク」に参加したいと思えますか」に対しては、「是非とも参加したい」は 1.4% (1.2%) に留まり、「テーマによっては参加したい」と答えたのは 22.1% (16.4%) であり、他の者は「参加要請があれば考える」28.0% (20.8%)、「参加するつもりはない」48.5% (61.6%) と消極的である。毎年、自主的に参加する学生はごく限られ、大多数は各学科か

らの推薦や指名で参加する状況であるが、参加した後の感想には前向きなコメントが多く見られ、フクトークにおける学生からの提案で生まれた韓国語やドローンを使った授業科目もあることから、今後、各学科の協力も得て、さらなる充実を図りたい。

4. 共通教育全体について

●「共通教育科目で充実していると思われる科目群」は何かという設問では、上位から「英語」18.6% (14.6%)、「ドイツ語・中国語・フランス語・韓国語など初修外国語」15.8% (5.4%)

「教養ゼミ」15.4% (18.6%)、「日本語表現法」10.8% (15.1%)と続き、教養教育科目の中ではE群の「芸術と健康・スポーツ」12.8% (3.0%)のみが突出して多く、その他の群はいずれも数%に留まっている。対面授業で実施することが適切な芸術や健康・スポーツなどの科目は、コロナ禍の下でも集中講義も含めて、可能な限り対面授業を保ったことが功を奏したことも考えられる。

●「入学当初、共通教育に期待していたこと」は何かという設問では、上位から「学生同士の交流」17.7% (11.6%)、「専門での勉強の基礎」17.3% (17.9%)、「専門以外の幅広い知識・教養」15.3% (17.4%)、「実用的な知識・技能」14.3% (15.6%)、「基礎学力の向上」11.3% (12.7%)、等の順になっている。ここでも前年度調査結果では第4位であった「学生同士の交流」が上昇したのは、学友との直接的な交流や接触を制約されたことへの裏返しであり、友人との交流に対する希望が表明されたと考えることが可能であろう。「教員との交流」は4.6% (3.7%)と、昨年よりわずかな上昇に留まった。この項目は一昨年度も3.2%と低い比率であったので、ここでも直接的な結びつきを求める気持ちがいくぶん表れているかもしれないが、教員の側から積極的に働きかけることで、本学の教員が学生に専門性や人間性において他所では得られない大きな影響を及ぼすことを期待したい。

●次に、これらの「期待内容に関して、どれほどの期待達成度あるいは満足度が得られたか」を%で回答することを求めたところ、満足度70%と回答した学生が最も多く、その割合は21.7% (11.5%)である。また、満足度100%~70%の学生の合計は全体の46.8% (27.4%)を占めた。この数値は昨年度に比べて、ほぼ倍増である。

●初年次教育科目として開設されている教養ゼミを履修して良かった点については、上位から「大学生としての学修スキルが身についた」15.3% (11.4%)、「高校生活(学習)から大学生活(学修)へスムーズに移行できた」11.8% (23.7%)、「学修意欲が向上した」11.1% (8.3%)、等の順になっている。例年ほぼ同じ順位であった項目間で変化が見られ、「高校生活(学習)から大学生活(学修)へスムーズに移行できた」と「大学生としての学修スキルが身についた」の順位が入れ替わった。一方、教養ゼミの改善点については、「特に改善点はない」という回答が47.1% (43.1%)と最も高い比率であるが、これに次いで「コミュニケーションの場がもっとほしい」15.3% (8.5%)、「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」10.1% (15.7%)、「成績評価の基準・方法をもっと明確にして欲しい」8.5% (9.1%)、「授業の進め方をもっと工夫して欲しい」8.4% (7.2%)、「学生の予備知識や理解度をもっと考慮して欲しい」5.5% (6.7%)といった順になっている。教養ゼミの改善点として挙げられた学生の意見には、「先生が学生時代教師にしてほしかったことをするなど積極的な姿勢の授業にしてほしい。」「同じような内容を少しだけ変えて受講数を増やすのはやめた方がいいと思います。」などに混じって、「対面授業がしたい」というコメントが見られた。

●本学で創設以来続いている教養講座に関して、令和2年度は会場での密を避けることが不可能であったため、予定されていた5回の講座がいずれも実施できなかった。来たる令和3年度は、感染症拡大の状況を睨みながら、この伝統的催しを何とか実施すべく対応策を講じる必要がある。

5. 語学・リテラシー科目について

●日本語表現法については、「とても満足した」20.9% (25.3%)と「ある程度満足した」51.2% (48.3%)を合わせると72.1% (73.6%)となり、概ね良好としてよいと思われる。

日本語表現法の難易度に関しては、「今の程度の内容でよい」82.0% (78.4%)、「今以上に高度な内容が必要」8.2% (10.1%)である。一方で「今より少ない内容でよい」とする者が7.9% (7.5%)、「まったく必要性を感じない」者も2.0% (4.0%)いる。日本語表現法の授業で良かった点を尋ねたのに対して、「日本語の基礎力が向上した」35.3% (37.7%)はシラバスで謳っている前半の目標、「文章表現力が向上した」23.1% (21.8%)と「レポート作成に役立つ」18.6% (16.2%)は後半の目標に相当するところである。こうしてみると、授業の目標は概ね達成されているようである。学生の自由記述には「漢字検定の1級や準1級を受験しているので日本語表現科目で学ぶ内容はとても役立つ。」が見られた一方、「80分同じような内容を繰り返したり、似たような問題を解いたり、何を学んでいるのかわからず、あまり身になる内容だとは感じなかった。」という批判的コメントも見られた。

●本学の情報リテラシー科目は、1年次生を対象とした科目で、高校で学んだ情報科目についての復習と大学教育で必要な最低限のスキルを学ぶ高大接続の要素をもっている。情報リテラシー教育の満足度を見ると、「とても満足した」28.8% (30.5%)、「ある程度満足した」47.7% (46.9%)と、8割弱の学生が満足を表明している。また、回答者の83.2% (81.2%)は「今の程度の内容でよい」としている。何が良かったかを尋ねたところ、「ICTを使用する技能が身についた」25.0% (22.4%)、「レポート作成に役立つ」22.3% (25.1%)、「ICTを使用して情報収集・分析・処理能力が身についた」17.2% (15.8%)、「情報倫理(情報モラル・情報マナー)が身についた」16.8% (14.8%)などの順になっている。情報リテラシーは大学生の学修や生活にとって不可欠な知識やスキルであり、加えてSNSをはじめとする情報サービスの使用には高度なモラルが求められている。スキルの熟達のみならず、モラルに適する態度形成に向けてもいっそう充実した教育の展開が望まれる。

●英語については、全学において、「とても満足した」23.3% (28.1%)、「ある程度満足した」50.0% (48.3%)を合わせると、73.3% (76.4%)が満足感を示している。これには、教材の難易度、教員の教え方、単位の取り易さなど、複合的な側面を含んでおり、学生がどの面での力、英語学力、集中力、努力する力などをどのように伸ばしたかを、明確に捉える評価法の開発が引き続き望まれる。「今以上に高度な内容が必要」とした学生は12.9% (16.4%)に留まり、「今の程度の内容でよい」が74.5% (67.5%)と多数を占めている。「今よりも少ない内容でよい」とする者が、全体では11.7%を占めた。とくに経済学部、人間文化学部など文系学部には「今よりも少ない内容でよい」と考える学生の高い比率が見られるのはいささか問題のように思われる。

次に、英語科目の良かった点については、「英語の能力(辞書があれば英文を読める力等)が向上した」が23.8% (28.6%)、「英語を学習する楽しさを実感した」が15.4% (14.6%)、「コミュニケーション能力が向上した」が12.8% (13.4%)、「能力別クラス編成が適切であった」10.4% (11.2%)の順であり、この順位は昨年も同様であった。英語科目の良かった点について、自由記述欄に記入された内容を見ると、あるネイティブ教員の授業について「授業の進め方を工夫してくれたのでとてもやりやすかった。」と好意的なコメントが寄せられており、「授業の指示なども全て英語なので英語力がつき、ネイティブの感覚が身についた。」というオールイングリッシュで行われる授業への高い評価が見られた。

●「初修外国語」のどの語種を選択したかについての設問に関して、回答したのは延べ564人である。回答者総数は660人であるから96人はこの設問に答えていない。薬学部については、初修外国語の履修を義務づけおらず、希望する者のみが学ぶことになっていることが主たる原因であろう。また、複数の初修外国語を学んだ学生も少数ながら含まれていることもありうる。この結果、回答者を語種別に見ると、中国語が46.6% (45.8%)、韓国語が23.6% (19.4%)、ドイツ語が15.4% (17.0%)、フランス語が14.4% (17.7%)の順になる。参考のため括弧内に示した昨年度の比率を見ても分かるように、初修外国語の履修は希望によることを基本としているため、年度による履修者割合の変動が起こる。昨年度と比べてドイツ語とフランス語の履修率が入れ替わった。平成30年度に新設した韓国語の履修者は中国語に次いで第二位を維持している。

●これら初修外国語 4 言語の学修に関して、「とても満足した」は 26.4% (34.9%)、「ある程度満足した」は 51.6% (44.4%) と、約 8 割が高く評価しており、「あまり満足しなかった」3.9% (5.4%)、「まったく不満だった」1.4% (1.3%) を大きく上回っている。昨年度もほぼ同程度の低い評価を下した者が見られ、そもそも外国語を学ぶことへの興味関心の有無ということを考慮しなくてはいけないかもしれない。授業の難易度について、「今以上に高度な内容が必要」は 4.4% (7.1%)、「今よりも少ない内容でよい」は 14.8% (13.5%) であった。多くの学生にとって初めて学ぶ初修外国語は、中高での英語学修の「しがらみ」を離れ、語学やその背景にある当該国の文化を学ぶ楽しさを伝えられるよう、教育内容や教授法に関して、なおいっそうの工夫が望まれるところである。

●「初修外国語の良かった点」については、「初修外国語を学習する楽しさを実感した」が 30.1% (28.4%) がトップであり、「初修外国語の能力 (辞書があれば原文を読める能力等) が向上した」が 25.2% (30.7%)、「異文化の理解が深まった」24.1% (18.1%) がこれに次いでいる。「専門の勉強に役立つ」を選択した学生は 5.9% (6.4%)、「コミュニケーション能力が向上した」5.6% (7.1%) であった。

6. 教養教育科目について

●教養教育科目 (A~F 群) を全体として見た授業時間数と内容について、「今の程度の内容でよい」と回答した学生が 86.5% (81.3%) を占めた。「今以上に高度な内容が必要」と回答したのは 5.3% (6.1%)、逆に「今よりも少ない内容でよい」と回答したのは 7.6% (8.7%) であった。

●教養教育科目履修の際に特に重視した点については、上位から「知的好奇心を満たす」42.7% (35.8%)、「基礎学力の向上」22.0% (23.4%)、「専門に役立てる」12.6% (11.5%)、「資格取得」5.2% (23.2%)、の順である。その一方、「単位数稼ぎと時間割の穴埋め」という、消極的なねらいを選択した学生も 17.4% (0.0%) も見られたのは今年度の特徴である。

●教養教育科目を履修した結果、良かった点については、上位から「幅広い教養が身についた」31.9% (30.8%)、「知的好奇心を満たした」28.0% (22.5%)、「基礎学力が向上した」15.6% (16.3%) の順であり、この設問に対する回答の傾向は一昨年度、昨年度とほぼ同様である。

7. キャリア教育 (1 年次履修のキャリアデザイン 1) について

●「キャリアデザイン 1 を受講して将来役立つ力が身に付いたと思いますか?」と、この科目に対する満足度を尋ねたところ、「とても思う」が 29.2% (24.2%)、「まあまあ思う」45.6% (39.2%) と、4 人中 3 人近くの者が将来役立つと回答した。昨年度の数値と比較すると 63.4%→74.8%と変化しており、11.4%の向上につながった。逆に、「あまり思わない」3.2% (5.7%)、「まったく思わない」2.4% (5.5%) と回答した者も見られた。

●キャリアデザイン 1 の難易度については、「今の程度の内容でよい」82.0% (79.8%)、「今以上に高度な内容が必要」4.7% (6.9%) という回答の一方で、「今よりも少ない内容でよい」9.8% (6.3%) や、「まったく必要性を感じない」3.5% (7.1%) と回答した学生もいる。ちなみに、過去 5 年間の全学部平均を早い年度から順に並べて比較して見ると、平成 30 年度までは時間の長短も含めて「今よりも少ない時間や内容で良い」と尋ねていたのに対して、令和元年度には内容の難易度に絞った質問に変えたものの、現状より簡素化したりレベルを下げることを希望した学生は 23.3%→20.3%→18.3%→6.3%→9.8%と変化し、「まったく必要性を感じない」と回答した者は 12.7%→9.9%→6.7%→7.1%→3.5%と変化しており、消極的評価を下す者の比率はほぼ減少傾向にあるが、更なる減少につなげるためには、一年生からキャリア教育が必要になってきている社会的背景 (例: 就職活動の早期化・多様化など) の説明を加えたり、自らキャリアをデザインすることの重要性について更なる啓発活動をおこなうことが必要不可欠だと考える。

●キャリアデザイン 1 を履修して良かった点については、全体的には昨年度からの大きな変化は見られない。良かった点として挙げられている上位 3 項目は「自己分析ができた」32.1% (28.4%)、「社会人基礎力が身についた」14.7% (15.6%)、「自己管理能力が身についた」12.1% (6.9%)、「将来の目標ができた」11.5% (11.9%) であり、この設問に対する回答傾向はほぼ昨年度と同じであるが、「自己管理能力が身についた」を高く評価するようになっている点は、括弧内に掲げた昨年度の比率から見ても比較的大きな変化である。

8. 学生の学修意欲について

●本年度 1 年次生における学修意欲についての質問項目では、入学時に「非常に意欲あり」34.7% (31.7%)、「まあまあ意欲あり」、51.1% (52.5%) と自己分析している。この数値は前期終了時に、それぞれ 19.2% (25.1%)、52.4% (55.6%) に変わり、さらに学年末に当たる今回の調査実施時には 23.9% (25.9%)、48.8% (52.7%) となっている。括弧内の昨年度の数値と比較すると、若干後退気味に見える。一方、「あまり意欲なし」、「まったく意欲なし」と回答した学生の合計の割合は、入学当初 3.2% (4.8%)、前期終了時 8.8% (3.8%)、学年末 7.6% (4.4%) と、意欲のない状態で入学し、その後、状態が改善するのではなく、いくぶん悪化していることが見て取れる。留年や退学防止の観点から、学修意欲の乏しい学生層に対する取り組みは、いっそうの改善を図る必要がある。

9. アンケート調査結果を踏まえた今後の改善策

以上述べてきたアンケート調査の結果を踏まえ、また、本文ではあまり触れなかった自由記述意見にも適宜言及しながら、全学共通教育の現況と改善策について今少し述べることで、本報告の結びとしたい。

まず、回答期間を延長し、学科を通じて協力を呼びかけた結果、全体としての回答率が昨年度に比べて 18.3 ポイントも上昇したことは喜ばしい。回答率は共通教育への関心のバロメーターとも言える。冒頭に述べたとおり、学科別に見ると、4 割強の回答率のところもあった。ゼルコバでの調査回答依頼や学生への一斉メールでの回答要請の他にも、大学教育センター運営委員会の委員である各学科長を通じて調査への協力を学生に呼びかけた努力の結果と言えるが、さらなる改善の余地がある。今年度はコロナ禍の下での遠隔授業が多かったのはマイナス要因であったが、今後とも共通教育担当教員の協力を得て、授業時間中に調査への回答依頼を教室で学生に直接伝えるなど、粘り強く協力要請を続けて行く以外にない。

大学教育センターが行っている各種の学修支援についての認知度の低さを深刻に受け止め、早急に改善策を講じなければならない。e ラーニング・システムについても同様である。「先生に会えずとも問題が用意されていて学習しやすく感じた。」と好意的なコメントが見られた反面、「システムの UI が直感的に操作しにくく、またページの移動の際にラグがあるためテンポが悪い」「セレッソの小テストとは違う扱いなので、課題の提出を忘れてたり、同じ科目で何度もログインしなければなく、セレッソでも同じようなことができるのであればセレッソで統一してほしかった。」など、技術面、操作面での不都合を指摘した自由記述もあった。改善方策を探る必要がある。なお、新入生オリエンテーションを初めとする各種の機会を捉えて、引き続き周知、広報に努める必要がある。

今年度の最大の問題は、共通教育科目に限ることではないが、遠隔教育による授業が多かったことである。その結果、「対面授業をもう少し増やしていろんな人と話してみたいです。」「オンライン授業のやり方をもう少し工夫して欲しい。」「遠隔授業が多い一年間でした。オンライン上での不具合や生徒の声に早めに対応してほしいと思う場合がよくありました。」「私自身入学してから、学習意欲は常に高く持っているつもりですが、対面で授業ができないことで学内施設も十分に利用できず、モチベーションが下がっています。一方で、対面授業が実施できるにも関わらず、オンライン授業よりも内容の感じられない授業もありました。対面授業では表情も説明も目の前で見れるわけですから対面授業のほうが分かりやす

い、学びたいと思えることがあたりまえだと思います。先生によってはたくさん工夫をされ、私たちができるだけ学びやすいように工夫をしてくださってはいますが、どの教科もオンライン授業の動画の後日閲覧や資料の開示など 1 年間専門知識を十分に学べていない私たちの基礎知識を考慮して、全体の授業を通して質のそろった授業を展開していただき、コロナ禍でも大学で学ぶメリットが得られるように工夫していただきたいです。長くなりましたが、今年度の授業形態が今後も続くと思うと大学入学の利点が見いだせず、改善していただきたいので意見させていただきました。よろしく願いいたします。」などの自由記述が多く見られた。真摯に耳を傾け、可能な限り改善に努める必要がある。